

学生と教員で作る文理融合リベラルアーツFD公開フォーラム

文理融合リベラルアーツ科目を担当して

— 担当教員による「系列として目指すもの」 —

「生命と環境」系列

長谷川 直子 (人間文化創成科学研究科 先端融合系)



LA生命と環境系列

長谷川直子

よろしくお祈いします。今日の私の発表は、ほかの先生方とちょっと趣向が違うかもしれません。まず初めに、学生さんに簡単に説明したいのですが、リベラルアーツということで皆さんの授業が開講されていて、それぞれいろいろな先生が各授業を担当しています。各系列毎に大体二人の先生が系列代表となって、リベラルアーツ部会というものを形成しています。年に何回か会議があって、リベラルアーツを今後どうしていきましょうかという話がされています。私は昨年度の半ばからこの大学に来ましたが、今年度からその部会にかかわっています。

今回のこのフォーラムをどんな形でやりましょうかという話し合いを、そのリベラルアーツ部会の教員の中の、さらに4人の教員で行いました。その4人の中に私も入っていて、前半で学生さんに五つぐらいのテーマの発表をしてもらいましょう、そして後半で教員が発表しましょうと、構成しました。どんな内容で発表してもらおうかということも考えました。そのときに、教員の方は「系列として目指すもの」ということにしました。自分で考えておきながら、自分の首を絞めるようなことになってしまっていて、今日の発表は、系列として目指すものというほどの発表はできませんが、今、「生命と環境」系列がどういう状況にあるのかということ、問題点なども含めて話をしたいと思っています。学生さんにそんな話までしていいのかという教員内部のお話までぶちまけてしまうような内容になっているかもしれないというのが、ちょっと心配ではあります。

まず、「生命と環境」系列が何をを目指しているかというのは、多分1、2年生の方に関しては、入学時にリベラルアーツのガイダンスがあってパンフレットが配られたと思いますが、そこに生命とそれを取り巻く環境を理解するための複眼的な視野の育成を目指すという一文が書いてありまして、それに尽きるのですが、私たちが目指すものをどういう状態で考えているかということ、もうちょっと詳しく話をしたいと思っています。

まず、リベラルアーツというのが昨年度から立ち上がって、そのときから「生命と環境」系列ができて、今年度で2年が終わろうとしているところです。授業は隔年開講が多いので、私たち「生命と環境」の系列に関しては、今年度でちょうどすべての講義が終わるということで、1サイクルというか1クールと書いていますが、ちょうどひととおりで終了しようとしているところです。

今の「生命と環境」がどういう状況にあるのかというのは立ち上がりのところから関係してきていますので、その話をします。

まず、リベラルアーツというものが自體をやることが決まったのが急だったということが一つあります。あと、「生命と環境」というものがかなり広い分野を対象にしているということがあります。しかもお茶大は、これだけ小規模な大学で教員も限られているということで、「生命と環境」という、とても広い分野を、限られたスタッフでどれだけ網羅できるかという問題が一つありました。

そこで、立ち上がり期の目標としては、パンフレットに書かれているような複眼的な視野を育成するとか、知識の引き出しを増やすということに落ち着いたという経緯があります。そのときに、系列として文理融合を目指すとか、系列として何をを目指すかといった目標はあまりなかったそうです。これらに関しては、私はそのときいなかったもので、その当時の先生からの話に基づいて作成しています。

生命と環境系列の経過①

- LAが始まって2年経過。生命と環境系列はLAが立ち上がったときから開始している。
- 隔年講義が多いので、LA生命と環境系列は今年度でちょうどすべての講義が終わり、1クール(1クールは2年)終了。

生命と環境系列の経過② (立ち上がり期の状況)

- 急に立ち上がったリベラルアーツ、
 - 「生命と環境」というかなり広い分野を対称にしていること
 - 限られた教員数の中でできること、
- ↓
- 立ち上がり期の目標としては「複眼的な視野を育成する」「知識の引き出しを増やす」というものであった。(「文理融合」、系列として何をを目指すか、といった目標はあまりなかった)

そして今、1クールがちょうど終わろうとしています。こういうフォーラムを行うということに当たって、系列の中で3回ほど会議を持ち、目指すものについての議論もそうですし、「今まで1クールやってきてどうでしたか」という意見交換をしたりしました。そのときに出てきた一つの意見が、理系教員の授業に文系学生が出席していること、もしくは文系教員の授業に理系学生が出席していることで、普段得られない学生の反応があり、教員にとってもすごく勉強や刺激になったということが、複数の教員から言われていました。

例えば、答えがないことを考える文系の学問に理系学生がすごく驚いた。そのような考え方に理系学生は慣れていないわけですが、そういうことに対応した授業内容の改善を教員がもう少し考えていく必要があるのかなということに、教員側があらためて気付いたということがあるそうです。あと、哲学的な質問を、生命に関係する授業をやっている理系教員に文系学生がぶつけてきて、「ああ、そうか、そういう考え方もあったのか」ということを教員があらためて発見するというようなこともありました。

それ以外にも、例えば私自身がやっている授業のことで言いますと、私は文教育学部の教員ですが、生活科学部の学生さんと、授業を受けてみて、私がやっているような分野に興味を持って、将来、卒論はそういう分野で書きたいという相談を受けて、なるべくその方向でできるように今準備をしているということもあります。そういうことは、やはり学部横断型の授業でなくては成り立たないことだと思います。

そういう意味で、文系、理系の学生が相互に交流するということは意味があるでしょう。特に私のように文教育学部にいながら自然科学をメインにやっているような教員にとっては、理学部や生活科学部の学生さんと交流するというのは、普段にない、いろいろな経験ができるということで、すごく意味があると個人的には思っています。

そして、系列会議で出た意見ですが、一部の教員にせよ文系理系の教員と一緒に教育について話し合いをする機会は今までほとんどなかったので、それをやる機会ができたということは、すごく大きい意味があると言っている教員もいました。

そして今、1クールがちょうど終わりかけで、正確にはまだ終わっていません。幾つか意見は出ていますが、全体の総括というのは、来年度の初め、もしくは今年度の末ぐらいに担当教員で行おうかと思っています。教員の意見だけではなく、今日も学生さんにいろいろ発表してもらいましたが、その意見もすごく参考になるもので、それも含めて今後どうしていくかを考えていきたいと思っています。

それ以外に、系列として何をやっているのかということでお話しすると、先ほど新井先生の発表でもキーワードの話が出てきていました。また、新井先生の発表で、グラフの中でどこら辺にどういう科目が位置しているかというのがありました。私たちの系列でも同じようなことを考えてまして、今開講されている科目が文系・理系、基礎・応用のどの辺りを網羅しているのかとか、授業間のつながりや関連性はどのようになっているのかということをも明らかにしたいと思っています。それを明らかにするために、それぞれの授業のキーワードを10個ぐらい、授業ごとに挙げてもらって、そのマップ化を行いました。

マップというのは、今日の配布資料の最後の方にたくさん続いています。ちょっと前後しますが、見ていただけます。資料がすごく小さくて、文字が読めないかもしれませんが、文字はあまり重要ではありません。初めに「全科目」があって、「1」「2」「3」「4」とスライドがずっと続いていると思います。これが「生命と環境」系列のそれぞれの授業がどの辺りを網羅しているのかをキーワードに基づいてマップ化したものです。

文字が小さくて申し訳ないのですが、縦軸が下の方に行くにつれて基礎・一般、上の方は発展・実践・応用です。横軸が、左の方は自然、右の方は社会ということで、それが理と文に対応します。各授業のキーワードを10個ずつ挙げてもらって、そのキーワード一つ一つがこの図のどの辺にあたるかを考え、配置しました。それぞれの授業ごとに色を分けてあります。ですから、新井先生が出していた図は、軸の取り方もちょっと違いますが、一つの講義名としてこの辺にありますという話でしたが、私たちのマップは、一つの授業の中でもいろいろ、文系的なもの、理系的なもの、基礎的なもの、応用的なものが入ってきているというのを図示したいという思いがあったので、このようにしました。

その後、一つ一つの授業のマップが出ていますが、この番号は、最後のプリントにある「生命と環境 1」「生命と環境 2」という、授業ごとに数字が付いていますが、その数字に対応しています。このマップは本当にできたばかりで、本人が確認してくれたものと確認してくれていないものがあったり、非常勤の先生から頂けていなかったりして、まだ全部そろっているわけではないですが、今できている段階のものをまず皆さんに見ていただいています。

これらを見てみると、例えば別々の授業でも同じキーワードが出ていた授業があったり、ものによっては完全に社会系、文系に偏っているものもありますが、文系理系両方にまたがっているものもあつたりします。基礎的なものを取って応用的なものを取るとか、学生さんが履修するときにこういうものを見ることで、手助けになるのではないかと考えてみました。これが完成したら、それを入学時のガイダンスなどで示して、履修の助けにしたいと思います。

生命と環境系列の経過③
1クールやってみて得られたこと

- ・理系教員の授業に文系学生が出席していること、文系教員の授業に理系学生が出席していることで、ふだん得られない学生の反応があり、教員にとっても非常に勉強・刺激になっているよう
- (例: 答えのないことを考える文系の学問に驚く理系学生、そのような考え方に慣れていない学生に対応した授業内容の改善を教員が意識、哲学的な質問を理系教員にぶつけるなど)
- ・一部の教員にせよ、文系の教員と一緒に話し合いをする機会が出来たことは大きい。
- ・1クールやってみての総括は、来年度の始めに担当教員で行う予定である
- (教員の意見だけでなく、今回のフォーラムでの学生からの意見は今後の講義内容を考えていって参考になるであろう)

生命と環境系列の経過④
(1クール終えようとしている今の動き)

- ・現在開講されている科目が、文・理、基礎・応用のどのあたりに網羅しているのか
- ・授業間のつながり、関連性はどのようになっているのか

↓

- ・これらを明らかにするために、各授業のキーワードに基づき、マップ化を行った。

あと、ここから教員の内部の問題に入ってきていますが、系列として目指すものを私なりに苦しんで考えてみました。教員同士で話しているときに出了意見として、まずこのリベラルアーツが突然立ち上がったときに、それに対してすごく賛同している教員と、そうでない教員にすごく温度差があるということが一つあります。もう一つ、これはすごく強調したい点として出たのが、教員の忙しさという問題もありました。そして、初めにも言ったように、「生命と環境」というものの守備範囲の広さに対して限られたスタッフしかないという問題もあるということがあります。

そういう中で、ではこうしましょうと、もし何か決めたときに、それに本当にみんなが乗っかってくれるかとか、トップダウン的になってしまわないかとか、そういういろいろな危惧がありまして、なかなか今示している一文以上に目指すものを決めることが難しいということに、今の意見としてはなっています。

そして、各教員が自然発生的に意識改革を起こしていくことを待つしかないという意見が今のところ主流かという感じです。教員同士で授業を関連付けていくといった動きは既にありますが、それは一部にとどまっているというのが現状です。

意欲的でない教員をいかに意欲的にするのかがポイントなのかなというのは、私が今考えているところです。一応、その系列をまとめる役を、私ともう一人の先生がやっていますが、もしそういう意欲的でない方がいたときに、それにうまく引き込んでいくことが課題なのかという気がしました。そういうことは、私のような若造は、そういうまとめ役とかは全くやったことがなくて、ぜひそういう経験がある諸先輩方に、そういうときにどうしたらいいかという助言をいただきたいと思っています。

そしてもう一つ、意欲的な教員とそうでない教員とか、教員の忙しさに関してちょっと具体的な話をします。例えばこのフォーラムをやるに当たり、今まで会議を3回持ってきて、こういうキーワードのマップを作ったりということをやってきましたが、その会議をやるに当たっても、例えばその会議をやりますと。日程を調整するために、日程を連絡くださいと皆さんに言っても、この系列で関係している教員は15人ぐらいいますが、返事をくれるのは7人、半分くらいです。そうすると、実際に日程が決まって会議に参加する教員は5~6人という感じで、今まで会議をやってきて、こういうキーワードでマップを作ってきましたが、そういう少人数で系列でどうするかという話を決めて果たしていいのかという意見も出たりします。

これが、意欲的かどうかという問題なのか、それとも忙しくて出られないからなのかというところは、ちょっとよく分かりません。こういうキーワードのマップを作るから、キーワードを出してくださいということに関しては、担当教員は全員出してくれたので、それくらいのかかわりだとしてできるけれども、会議に出るほどの時間や熱意はないということなのかもしれないと今のところ考えています。それをどうまとめていくかということも考えていかなければいけないのかなと思っています。

そして、もう一つ「生命と環境」系列の課題として内容的なことを言えば、どちらかという今の「生命と環境」系列は、生命がメインで環境がサブとなっています。その中で、どうやって環境という部分を充実させていくかという話があります。ただ、それに関して専門家があまりいないという中で充実させていくというのは、果たして本当に現実的かどうか。そういうことも検討の課題になっているということです。

また、「生命とそれを取り巻く環境」という系列名にするという方法もありますが、環境の科目は生命を意識した授業内容にもなっていない。そこを今後どうするかという問題と、例えば生物学の知識のない文系教員が生命を取り巻く環境として講義できるのかという問題もあるかと。これは私の個人的な意見ですが、思っています。

今、キーワード配置はもうほとんど完成してきています。各授業をどのように有機的に位置付けていくのかは今後の検討課題だと考えましたが、今日の学生さんの発表を聞いていて、むしろ有機的につなげていくのは学生さん自身なのかなという気もしました。この授業とこの授業は関係していて、こういうふうにするみたいなモデル履修を示す可能性もあるかなと考えていましたが、そういうやり方をすると取り方に制約が出てきたり、既にそういう意見も出ていましたが、逆にいい面が殺されるということもあるかもしれない。学生さんはこういうキーワードに基づいて、取った授業の中から、今日の学生さんの発表でも、それぞれをちゃんとうまくつなげて自分の中で理解消化しているようだったので、そういうふうには有機的につなげるのは学生さんかなという気は思いました。

もしできれば、やはりそういう科目同士のつながりをまとめる一つの科目からステージを設ける必要があるのかなという気もしました。

この後のスライドは、全部キーワードが続きますので、発表の中では省略します。「生命と環境」系列に関する発表はここまでです。

補足情報として、今の3年生の人にLAに関してちょっと意見を聞いたのを紹介させていただきます。まず、3年生に関しては、リベラルアーツに関する説明がなかったそうです。その学生さんいわく、リベラルアーツで何がどう変わったのか分からないまま進んでしまったと言っていました。

それと、リベラルアーツが変わったことで、多分定員が決められている授業のことだと思いますが、1年生、2年生、リベラルアーツが開始してから入学した学生さんが優先になっていて、自分たちが取れない授業があったということに不満に思っているというような意見も

生命と環境系列の今後は？①

- ・意欲的な教員とそうでない教員の温度差
- ・教員の忙しさ
- ・「生命と環境」の守備範囲の広さvs限られたスタッフ

↓

・「目指すもの」を決めることの困難さ

↓

- ・各教員が「自然」発生的に意識改革を起こしていくことを待つしかないか、という意見が主流？(教員同士で授業を関連付けていくといった動きはすでにありますが、それは一部にとどまっている)
- ・意欲的でない教員をいかに意欲的にするかがポイントか(助言求む)

生命と環境系列の今後は？②

- ・内容的なことを言えば、「生命」がメインで「環境」がサブとなっている今の科目構成の中で(専門家もいないのに)どうやって「環境」を充実させていくか
- ・「生命」がメインで環境が不十分。つまり「生命」と「環境」は対等ではない。かといって「生命とそれをとりまく環境」と銘打てるほど、環境の科目は生命を意識した授業内容でもない。現内容に即した系列名に変更するか、内容を系列名にあわせるか、今後要検討か。(生物学の知識のない文系教員が生命を取り巻く環境として講義できるのかも要検討)
- ・キーワード配置は完成したが、各授業をどのように有機的につなげていくのかは今後の検討課題。

ありましたので、紹介させていただきます。

私の発表は以上になります。

次のスライドから生命と環境系列で開講されている各授業のキーワード配置図が続きます。
 キーワードの前の数字は科目番号を示し、授業ごとに色分けしています。

このような図を入学時のガイダンスで示すことで、学生さんが履修科目を決定する際に参考になるでしょうか？
 学生さんの率直な意見を希望します。

